

弘前藩日記目録

(七)

弘前藩政史研究会

延宝九年酉年正月小

(月番記入なし)

一丙辰日 晴

1 7 正月行事

8 32 年始の役付

二丁巳日 晴小雪

1 8 諸役人の正月の御礼

9 門飾所々の張番

10 例年の如く江戸へ飛脚、金二百両を登す

11 江戸

より飛脚

12 梶川左内救免、津輕左内と改むべき

ことを仰渡す

13 14 兼初め、剣術初め

三戊午日 晴 吹雪

1 9 諸士御礼

10 27 諸初めの記事

28 51 同

夜御給士之仕才

52 71 同夜の番人について

72 江戸へ飛脚

73 江戸より飛脚

74 当年参勤のと

きの手綱について

四己未日 晴 吹雪

1 梶川左内救免の奉書到着につき仰出

2 御節年男

納の儀式

3 柳川素庵年頭の祝儀のため登城、対面

4 御書院にて全書の請談

5 神又兵江に左内救免御

礼の使者を命ず

6 左内救免の奉書の御請を登す

7 城内での裏付の上下着用について

五庚申日 晴 雪

宿

六辛酉日 晴 吹雪

1 2 4 6 寺社御礼

3 左京の家来三名御礼

6 江

戸直中の神又兵江方へ追掛飛脚

8 七種の祝儀に

登城の面々の若殿様西之丸へ御出の祝儀について

七壬戌日 晴 雪

1 5 7 三種の祝儀并若殿西丸へ登城の祝儀

4 6

年始の祝儀御料理のため久昌院へお出

の七種の御拍子について

8 21 久昌院御出につ

いての役付の寛

22 対面所他掃除の役人

八癸亥日 晴

1 御廐の書付につき牧太多右江内、小倉六左江内へ申

渡 2 西郷へお出の節の不届の反輕重舎の旨申付

九甲子日 晴

1 5 4 百沢寺方と寺社年始の御礼

5 素庵様へ御出

6 雄鑑講談

十乙丑日 晴

1 2 明十一日の具足祝について

3 久昌院へ鳥目干

雪を盡す

4 5 7 所々の雪切奉行申渡の寛

8. 山鹿八郎左江門召出についての諸士の記憶について
申渡

十一丙寅日 賜

1. 具足祝 9. 北村藤九郎御目見 10. 具足

祝儀 21. 具足祝の祝儀の御礼 24. 小倉作左

江門他に無始規式の給仕の褒美 25. 山鹿八郎

左江門御目見 27. 重ねて山鹿八郎左江門を召し、

津輕大学と称し、家老役を仰付け、知行十石を下さ

る旨仰付 28. 次太夫を召し、城代役を命じ、名を

將監と改むべき旨仰付 29. 津輕左内を召し、二百

石加増(五百石となる)名乗宇政をゆるし政順とす

べき旨仰付 30. 明後十三日の鉄炮初の次才仰

引江戸へ飛脚

十二丁卯日 晩 要

1. 寄合初 2. 西馬場で近習役馬御覧 3. 大学殿召

出の祝儀のため諸士登城 4. 甚右江門血忌のため

登城なし 5. 寄合場で御祝儀

十三戊辰日 賜

1. 八幡宮で吉兆開きの鉄炮打初 2. 西馬場で近習小

姓組の鉄炮御覧 3. 明十四日の長勝寺仏参につい

て 4. 明後十五日八幡宮へ御参詣の旨申渡し

5. 在々かこ霧の卯、白鳥の卯差上ぐこと無用の由仰出
十四己巳日 賜

1. 2. 高源院様御廟へ参詣 3. 書院にて松田五郎左江

口兵書講述 4. 甚右江門血忌御礼

十五庚午日 吹雪

1. 伊左江門以下一門重役の御礼 2. 津輕大学知行持

領、役儀、名乗持領の御礼 3. 將監役儀の御礼

4. 左門知行加増、名乗持領の御礼 5. 外記江戸より

下着の御目見 6. 北村藤九郎以下例月の御礼

7. 遠方御役、病氣のため年給の御礼不罷出面々御礼

8. 八幡宮へ参詣 11. 江戸より飛脚 12. 御

手廻へ番頭以下へ組入の覚書 24. 甚右江門血忌罷

出 25. 江戸よりの鷹師を小祝源右江門へ

26. 諸士請年 of 証文 29. 八幡宮神主へ金二百疋そ

の他を下さる 30. 江戸の左京様景色懸敷ため明日

発足の鳴海孫兵江へ時服を下さる 31. 御料馬

を大学、玄蕃、監物へ賜る

十六辛未日 吹雪

1. 江戸、八門の馬他二頭を二の丸蔵へ入れることを申渡

4. 合子沢の馬を青沼与四右江門へ預ける旨申渡

十七壬申日 賜

1. 7. 東照宮へ御参詣 8. 明十八日の年始御祝儀

の能児物について 10. 式日寄合、大学初めて出座

11. 江戸より飛脚 12. 三日出發の鹿掛飛脚、新城にて

書箱を渡した日夜下着 13. 神又兵江に比山にて書

箱を渡した鹿掛飛脚八日の朝下着
十八癸酉日 賜

1. 年始祝儀の能初についての書状、手紙の寛
2. 右
の面々御礼に登城 3. 右右についての掃除奉行
等の申渡 12. 36. 能初めの行事

13. 松前兵庫からの使者到来

十九甲戌日 (天皇なし)

1. 若殿、主殿様から年始の祝儀 3. 若殿、主殿様

より久昌院へ年始の祝儀 4. 5. 初夢喰献上、料理

のこと 6. 松前兵庫の使者を外記宅にて饗応

7. 8. 松前兵庫から敵虎三枚他の進物献上、松前領飢

饑に際しての沖口米五十石について御礼言上

10. 17. 使者の饗応について 18. 三上十兵衛へ勤務の

復奏

廿二日 晦 風

1. 献上の朱土の道中について申渡 2. 外記の番人に

ついて仰出 3. 北村藤九郎他裏校向御番仰付

4. 細工人二名に三両三人扶持を下さる旨申渡

5. 松前兵庫の使者罷足

廿一丙子日 晴 申刻地震

1. くら神明宮御参詣 6. 戸田次五郎門を普請奉行と

作事奉行入替の旨申渡 7. 黒滝助右江門を馬廻一

番組番頭跡役とす 8. 縁組許可

11. 名替許可 11. 名替前髪取許可 12. 初御目見許可

13. 湯治御殿許可 14. 申上刻西の馬場で衆馬 15. 申

下刻地震、一門家中登城 16. 江戸へ飛脚

17. 表新右江門へ加増 18. 鶴川常慶茅子上村半兵衛に
切米三両三人扶持仰付

廿二丁丑日 晦 風

1. 式目寄合 2. 松前兵庫へ飛脚 3. 湯屋で暇差を

盗人七者に箋金申付 4. 未上刻西馬場にて春馬御

覧

廿三戌寅日 昨夜中雨及終日

1. 3. 与力十五名を手廻に召直すことを仰付 4. 原

田伊右江門江戸御供仰付により下人召直のことを申

渡 5. 犬堂に馬具鞍を下さる

廿四己卯日 吹雪

1. 式目全書講習 2. 久昌院へ御出 3. 昨廿三日古

寇不動出汗の由今朝注進、神衆を申付く 4. 折笠

勘四郎懸ヶ沢御蔵奉行を勤めにつき賄扶持を下さる

5. 江戸より飛脚

廿五庚辰日 晦 風

1. くら報恩寺へ仏参 6. 古懸不動出汗につき神衆仰

付

廿六辛巳日 晴

1. 名替許可 2. 初目見許可 3. 古懸にての神衆を

勤めた中川小重人帰着 4. 去る三日江戸で若殿様

年始の御礼の祝儀のため一門から番頭まで登城

5. 久昌院様去番へ御出

1. 式日寄合 2. 家屋敷持借願許可 3. 病氣による御服願許可 4. 養子願許可 5. 座等・頭盆都相役願の通り伯都仰付 6. 田中次左江門・隠居願・跡式許可 7. 舟越伝助抱領娘病人につき勝手次才許可 8. 洪水にあり田地荒行者の普請中の御役御免願許可 12. 抱領願許可 13. 養子願許可 14. 養子願許可 15. 寺社の後住につき仰出す 16. 白鳥一左衛門より上る 17. 久保田市郎左江門・病氣・李復罷出

廿八 癸未日 晴

1. 恒例の諸御礼 2. 名替の御礼 3. 北村薩九郎他恒例の御礼 4. 書院で月並の御礼 5. 家督の御礼 6. 隠居の御礼 7. 新地の御礼 8. 加増の御礼 9. 御役料御礼 10. 祝言の御礼 11. 名替の御礼 12. 初御目見 13. 護先寺後住御礼・法立寺・旋居御礼 14. 年始の御礼 15. 蒙督御礼 16. 祝言御礼 17. 名替御礼 18. 初目見 19. 江戸にあつて二名役料の御礼不消 20. 遠方役所の主の三名祝言御礼不消 21. 病氣の有名替の御礼不消 22. 病氣の者二名祝言の御礼不消 23. 病氣の者二名初目見の御礼不消 24. 細工の者切米三面三人扶持仰付 25. 落の小知行の者の知行受取

廿九 甲申日 晴 風

1. 書院にて松田五郎左江門・置書の請談 2. 西馬場へ

仰出 3. 昨廿八日江戸より下着の渡辺嘉兵衛病氣のため不罷出 4. 昨夜吉田町の火災へ家一軒焼失へにつき郡奉行注進

延宝九年 酉年二月大

(月番記入なし)

一 乙 丑日 晴

1. 恒例の諸御礼 2. 領分中兼物御免仰出 3. 御用人三人大分之借銀有之由及御召當年来年酉年に御済可被下由被仰出之 4. 久保田市郎左江門・銀分中兼物御免 5. 御用人三人に公方様より御耳領の高盛下さる 6. 佐藤新五左江門・當年江戸御供仰付けらる 7. 精勤の勘定の者へ御蔵米三斗依匹或高五十石宛下し置く 8. 精勤の御吟味所物書に同じく三十石 9. 精勤の御吟味所物に寝美銀三枚 10. 御勘定見習の者八名に五人扶持下し置く 11. 赤平源十郎儀・親源右江門・輪々精勤・去年の洪水にて能く勤めしも・溺死・御耳に達し・家督相直無く仰出され本銀三百目下し置かれ・足輕に仰付けらる 12. 江戸・股忠庵御供の時分并に江戸にある節前の通仰出られ・御國元にて切米の外三人扶持下し置かる 13. 御鉄砲臺屋長右江門・伴長兵衛・少々細工仕候得共未幼少につき・御切米銀百目三人扶持下し置れ・身の成立次才御取立仰付けらるべき由・町奉行へ申渡 14. 御仕立屋野本次郎右江門・善付牛之介御扶持方三人扶

持下し置かれ御用仰付けられ候。向、御工も致し今後
役立と罷り、精を出すように町奉行に申渡

17、竹屋八郎兵衛才八を江戸羽水、相果候、同人才を
次兵江新規ニ御扶持方三人扶持仰付けられ、細工をも
習致し御用にも相立候はば段々成立候様右に金じ
18、役儀稽勤の山形作右江戸更港太郎右江戸菊池甚兵衛
に銀子三枚、沼山勘四郎へ二枚下置る

19、吉川今右江戸病人に罷成、御暇下され将義追而預申
立、番量才才仰付けられる迄也 20、樋口理左江戸三

人扶持のところ数年来精勤につき御切米金五両下さ
れよく勤めるよう御用人直申達す 21、大寺儀加判

且当月の月番を仰出さる 22、御発書三月十五日と
仰出さる 23、神源兵衛遠方の御役につき年頭の御

礼は青銅持

二丙戌日 賜

1、素庵へ今晚料理を、相伴伊左江戸、濱正將監、津輕
外記、津輕左門 3、5、9右料理仕度才

10、式目寄合

三丁亥日 賜

1、吉野与五右江戸他二名江戸會仰付けらる 2、久保田

市郎左江戸大目付、小山新右江戸目付仰付けらる

3、御金蔵奉行に岡吉右江戸、有藤権左江戸仰付けらる

4、御紙蔵奉行に八木橋甚兵衛、鈴木次左江戸仰付けらる

5、御本綿蔵奉行に石井茂兵衛、内善江戸仰付けらる

6、白鳥一、但二番鳥石濱村源四郎差上、米三斗五年下こ
る 7、白鳥は台所に多く御入田在き箇三番鳥監

道連、その他は勝手次才 8、久保田へ御歩行羽織

地の絹質御町人小寺三郎右江戸に賜金、歌喉之渡す

9、右御實の立合足輕目付に旅費支給、10、右の旅費は

此度ばかりにて前例としない、11、松前兵庫様への

飛脚返書持参にて帰着、12、14、石屋長九郎に御寛

の旨申渡寛、15、22、長九郎に申渡の節御人列座の

寛

四戊子日 賜

1、式目聖書讀談、2、丹野席右江戸の私用一泊旅行野

可、3、江戸より袴脚、4、御蔵百姓中田地盜作り

の者等舎のところ、改めて追放を申付けらる、6、等

廻寺内の衣類を盗み取り聖廟寺の大仏に釘打ち候由

追放、7、江戸へ飛脚

五己丑日 晴 卯刻大風

1、昨夜江戸より飛脚、2、若殿様公方様より御有拜領

3、御判紙請取に十枚紛失の條の者通塞、差違申付けらる

六庚寅日 雪

1、2、若殿様拜領の御有太殿様に進められ四日到着、五

日の登頂戴、御相伴の寛、3、江戸より鹿牛与右江

門下着、御目見、4、油布宇大夫ニ木柳孫左江戸ニ

人無足にて今年江戸御供相勤に就御圓ニ百俵宛下置

れ、道中江戸等中江戸扶持八人は御圓にては不下置

5. 右二人へ御用人より申渡しの竟 6. 大連寺内蔵丞
儀親源左江内穀年相勤家柄も筋目あるにつき若年左
から家督相違なく御付けられ御留守屋組に入れらる
て勘定方一町田理兵江広須新田所に御付けられ、岡勤
解由と諸式申合の上然可様に申渡す 8. 小幡孫八
精勤につき御小性組に入れらる

七辛卯日 陽

1. 式日寄合 2. 4. 御金蔵、紙蔵、本綿蔵奉行誓紙
八壬辰日 陽

1. 江戸より薩脚 2. 対馬清右江内に預けられていた
工藤左助を清右江内江戸登につき一戸孫兵江に預け
る 3. 新屋建之丞を江戸へ使者一合徳院の御達事
の能につき

九癸巳日 陽

1. 江戸へ飛脚 2. 田浦四郎右江内御小納戸役御付け
られる 3. 長勝寺後住海蔵寺、耕春院後住隣松寺
御付けらる 4. 松田五左江内式日書講談

5. 長勝寺へ寺菴中召寄せ海蔵寺事長勝寺後住御付けらる
旨申渡 6. 耕春院後住も右同 7. 今晩久昌院様

午刻御入為、御料理二汁七菜 8. 時分使者清野半
左江内 9. 今度の御印紙相違の儀につき御耳に座

御機嫌不宜、内門申付、累土刑部左江内申渡、以下
両連者に夫々失罰を相加う 10. 右の者を御評定所
に残らず召寄、大目付、目付より申渡様に御付ける

十甲午日 陽

1. 杉山八兵江江戸より帰着 2. 八兵江御目見
3. 病氣中の用人支配の両差左江内の役銀差上を許可
4. 石渡御蔵目付誓詞

十一乙未日 雨

1. 大寺蔭病にて今日登成無し 2. 浅利伊兵江江戸よ
り帰着、御用狀持参

十二丙申日 陽

1. 田山藤左江内誓詞 2. 5. 諸役誓詞 6. 浅利伊
兵江御目見 7. 八兵江江戸より持参の近江附一箱
差上 8. 江内御山の境目を沢井新右江内見分

十三丁酉日 陰 風

1. 御回運標當年下向につき、領令中の御通り筋の場原
又は一里塚等の改候の儀連年外記北村武左江内惣奉
公御付けらる 2. 碓戸岡筋唐午より右江内青森筋櫛
引源左江内終ク次郎丹野席左江内相勤むべき由 三
人外記武左江内へ相尋申可き旨申渡 3. 大寺痛平
庵今頼罷出 4. 提款無役、勘進相探此類の者芝居
を立見物の儀今後無用の由申渡 5. 6日鳥差上ぐ

7. 来月十五日御発駕の予定はありだが、御代替大名様
の発駕が早くなるようで、三月九日になるかもしれ
ないから、御供の者は仕度するようにと申渡

8. 今度改の御印、御押始 9. 今晩御交遊はさる
10. 御手直具頭支配の御道具書付一通松田清左江内へ渡

14 原十兵衛紅鯨々沢御蔵横目仰付らる
十四戌戌日 霜 賜

1、長崎寺へ廟参 御名代比多村監物 2、高杉与三右
江内病氣にのき陰居願、今日精進日にのき明日許可
を申渡 3、御有駄印六十御家中御借小荷駄印五十
合百十、申付可く、申渡 4、森平半介の持病故寢、
暫御赦免の願許可

十五己亥日 霜 賜

1、5、6 恒例諸御礼 7、5、9 家督、祝言、名替御礼
10、11 御目見 12、5、16 祝言、名替、御礼、御目見等
17、18 隠居許可家督申渡 19、寄合の者大名差物立のれ
2、黒髪に仰付けらる旨申渡 20、五十嵐太郎右江内
上方御用精勤にのき褒美金子五十両下置かる
21、右同人、御村本御米拜借仕候代銀一貫三百八十四兩
三分四厘、申渡より三ヶ年上納仰付けられ候え共、上
方にて冬相詰、手前不勝手難儀仕候に付、来暮より
三ヶ年上納仰付けられ度旨申立、爰の通申渡
22、無足にて漆支配に精勤の筆山茂左江内に御切米金子
六兩五人扶持仰付く 23、野崎十太夫冬御奉公仕、
其上八十三騎に候故、持甚四郎幼少に候え共金子五
兩二人扶持下置かる旨一類共に申渡 24、高杉兵兵
江江戸御供仰付けらる 25、田村市右江内江戸登中
付けられ候處病死故、鈴木惣左江内を代つて申付く
26、木村七之丞御細工見習のため江戸登り仰付かる

27、油屋植田伊兵衛、藤本兵兵衛五人扶持充て下置
かれ、油粕の代金十兩右二人に遣され、自今以後精
勵致すよう御町奉行、御勘定奉行より申立次第御取
立成せらるべき由申渡 28、御勘定の者今乃右江内
上屋敷三上嘉右江内御借成られ候儀申渡
十六庚子日 賜

1、特近を召出し他国でも御印出し候儀相勤可申候、専
細玄番大寺より申渡可仰せ出さる 2、清江半右江
内毛内有右江内御印出候儀仰付けられる旨申渡
3、岩崎藏右江内井尻吉太夫儀諸役運上の類焼印出し申
すべき旨申渡、則書付相渡される 4、吉村場左江
内外五名へ夫々支配へ御印出し候由申渡 5、戸田
次左江内精勤に付御勘定奉行仰付けらる 6、道普
請一里塚の儀津輕外記北村武左江内へ惣奉行仰付け
られ候につき御手廻大人中藤牛与右江内、加役津島
万右江内外五名の通り仰付けらる 7、原十兵
衛誓詞 8、鯨々沢御蔵横目御蔵奉行相詰候中、夥
々沢に於て扶持方米拜借仰付けられ、此方にて差上
申可き旨申渡 9、戸田次左江内名同役松浦次左江
差合に候間改め然可き由御家老中内意申され候にの
き、孫大夫より改め申渡旨申上候處願の通仰付けらる
10、江戸より飛脚、歳暮御内書并御面廻様今度御下しの
御奉書等四通到来 11、初雁一御町より買上申由御
台所人申立則披露をとぐ 12、今度御面廻様御下着

先差延進而仰付らるべき御意申渡

十七年五日 晴 酉刻 雨

！式日寄合 2. 戸田琢太夫誓詞 3. 一年作渡方立

合目付十三名誓詞 4. 福士藤内儀江戸へ召連れら

るべき田申渡 5. 御児小性成田八十郎御切米金一

枚仰付らる 6. 御徒目付野呂琢左江門儀去年京大

阪へ罷登御用精勤につき加増三両、都合六両仰付け

らる 7. 同じく他の二人者者加増一両都合五両仰

付けらる 8. 築館丹知儀只今迄銀八十目の切米の

ところ加増金二両に仰付けらる 9. 臆助黙綱旧

冬より江戸に推させ置候處頃日より候由にて生廻

り候一進藤在兵江より宿次にて差上ぐ 10. 江戸よ

り候 11. 評定所物頭中に在藩、太学へ申渡の寛

十八年 風雪

！御又兵江奉書持参し下着、御目見 2. 進藤左兵江

書我より来、御目見 3. 山鹿甚五左江門より太学

で召出候儀差上ぐ 4. 江戸へ飛脚 5. 大組足

輕組共近日野江罷出唐由、許可 6. 7. 御訪御回遇

仰付られた保田甚兵江、佐々島三郎、飯河伝右江門

様へ使者、 8. 右御三人江戸参駕の一両日前城伝左

江門をして御用を伺ふべき旨 9. 右は右御三人へ

の進物の寛 10. 田村藤大夫江戸の近付も多く有に

つき諸事宜様相勤可き旨仰出 11. 右御三人様への

使者について 12. 公方様の日光社参につき飛脚到

着、三月朔日参駕、御社参の飛脚参りざれば三月九

日参駕と申渡す

十九癸卯日 晴

1. 長勝寺住職の御礼 2. 耕春院住職の御礼

3. 松田五郎左江門の兵書講談 4. 大湯五郎兵江奉書

御用状持参し江戸より下着 5. 大湯五郎兵江御目見

6. 吉田市左江門参駕につき小田桐牛右江門御目付の誓紙

廿甲辰日 晴

1. 4. 玄蕃以下へ塩白鳥、塩菱喰など下す 5. 江

戸より飛脚 6. 杉山八兵江今朝病死、玄蕃、外記、

左門、隼人登城延引 7. 玄蕃尾御免明日より罷出

の由仰出

廿一乙巳日 晴

1. 江戸より飛脚 2. 御歩行兼平小太右江門御徒三番

之小頭仰付旨申渡す 3. 玄蕃尾御免登城 4. 一

町田斎、尾御免今日罷出 5. 中川小隼人当年御供

につき支配の者の取扱いについて仰出 6. 父田家

悦金子四両の切米仰付けらる 7. 刑部左江門血忌

故致下宿 8. 福士跡三右江門神又兵江御当分支配

のところ、右組の中村元仁右江門無調法これあるに

付延慮仕、罷在の趣、御目通へ出候儀は無用、出番

相勤可申由、申渡

9. 神又兵江組無調法遠慮罷左候趣同右

(以下次号)